

## 「自己生成」概念の精神史 —キェルケゴール思想の固有性—

中里 巧

本論文は、北欧北方精神史という観点から、S.キェルケゴール思想における固有性ないしは本質的特徴を、「自己生成」という概念から明らかにする試みである。「自己生成」という概念は、哲学的－神学的な用語であるが、精神史ないしは文学史の領域の表現に置き換えれば、徳の究明・自己陶冶・教養修身といった言葉が相応しいだろう。本論文では、キェルケゴール思想における「自己生成」概念を、「声の文化」と「文字の文化」というヨーロッパ精神史における二代潮流の観点から分析するとともに、彼の「自己生成」概念がとりわけ関連するキリスト教的諸要素を、古代的－正教的位相と近代的プロテスタント的位相の両面から、さらに分析することをとおして、キェルケゴール思想が現在なおきわめてユニークな存在意義を保持しつつあることを垣間見てみようと思う。

第一に、本発表で用いる精神史のアプローチの導入として、プラトン著『パイドロス』*Φαῖδρος*\*<sup>1</sup>やW. J. オング (Walter Jackson Ong 1912-2003) 著『声の文化と文字の文化』*Orality and Literacy*\*<sup>2</sup>などからヨーロッパ精神史の二代潮流を紹介して、そうした二代潮流がキェルケゴール思想の「自己生成」概念において如何に結実しているか明らかにする。第二に、そうした「自己生成」概念において古代的－正教的特質と近代的－プロテスタント的特質が如何に絡み合う形で現れているか、論究していく。そして第三に、以上の考察からキェル

\*<sup>1</sup> プラトン著『パイドロス』藤沢令夫訳、岩波文庫、2015年。

\*<sup>2</sup> W. J. オング著『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・粕谷啓介訳、藤原書店、1991年；*Orality and Literacy -The Technologizing of the Word-*, by Walter Jackson Ong, 30th Anniversary Edition, Routledge, New York, 2012, (the first edition, Methuen 1982).

ケゴール思想が現代においてその存在意義を批判的にとりわけ発揮するのは、現代的思考の如何なる点に対してなのか、ニコラス=G.カー（Nicholas George Carr 1959-）の諸著作なども併せて紹介しながら簡潔に指摘しようと思う。

## 1. ヨーロッパ精神史の二大潮流

以下、『パイドロス』と『声の文化と文字の文化』の二つのテキストから、話し言葉を基層とする文化と書き言葉を基層とする文化それぞれの特徴を抜き取る仕方で、簡潔にまとめる。

### (1) 『パイドロス』

ソクラテスは、書き言葉を非難した。その理由は、人間を無知であることの自覚から遠ざけて、人間を高慢にさせる根本的に欠陥のある働きが、書き言葉にあると考えたからである。ソクラテスによる書き言葉に対する非難は、『パイドロス』\*3後半に出てくる。メリアン=ウルフ（Maryanne Wolf）は、その著作『ブルーストとイカー―読書する脳の物語と科学―』\*4 *Proust and the Squid –The Story and Science of the Reading Brain–*のなかで、大脳生理学の観点から読む行為と脳神経の関係について論究して、ソクラテスの非難の要点を簡潔に三点にまとめて、1. 書き言葉は柔軟性に欠ける、2. 記憶を破壊する、3. 知識を使いこなす能力を失わせる、と述べている\*5。真実や真理を追究するいとなみとはソクラテスにとって、自分自身の考えや生き方などをかぎりなく成長させる終結のない行為であり、ソクラテスは、協働者同士がお互いに精神や生き方を改善しあっていく仕方で議論を高めていくことを以てして、真理追究

\*3 プラトン著『パイドロス』のうち、161頁以下参照。

\*4 メリアン=ウルフ著『ブルーストとイカー―読書は脳をどのように変えるのか?―』小松淳子訳、インターシフト、2014年；*Proust and the Squid –The Story and Science of the Reading Brain–*, by Maryanne Wolf, Harper Perennial, New York/London/Toronto, 2008(2007).

\*5 メリアン=ウルフ著『ブルーストとイカー―読書は脳をどのように変えるのか?―』のうち、109頁以下；p.69ff.in *Proust and the Squid –The Story and Science of the Reading Brain–*, by Maryanne Wolf 参照。

の方法を、ディアレクティケー（対話法）と呼んでいたのである\*6。

## （2）『声の文化と文字の文化』

声の文化の代表的担い手が、吟遊詩人ホメロスであり\*7、声の文化から書く文化へ移行する代表的担い手が、対話編を書き残したプラトンであり\*8、書く文化の代表的担い手が『弁論の術』*Τέχνη ῥητορικὴ*や『詩学』*Περὶ ποιητικῆς*という仕方、声の文化を書物のうちに組織化して、読み書きに収斂する形で哲学することを確立したアリストテレスである\*9。言語史の大半の期間は声の文化であり話し言葉であり、文字の発生以後なお書き言葉は最近まで、話し言葉の補助手段として機能していた。吟遊詩人は、数千種類以上の常套句と百種類近くの主題を記憶している。吟遊詩人は、記憶している常套句を適宜主題にしたがって自分流に配置して詠うのであるが、プロットや話の進行が主眼ではなく、聴衆と吟遊詩人が、その場において一体化し融合化することに主眼がある。

声の文化の特質は、伝統や全体性および累積性にあり、分析や規定や定義といった特質は、書く文化に属する。声の文化は、記憶が繰り返されて冗長であるが、書く文化は、営みの速度が極端に遅くなる反面で、文脈や一連の筋書きを作り出す。声の文化は、生活と密着したかたちで維持されていて泥臭く、洗練されてはいないのに対して、書く文化は、洗練されており抽象度が高い。言い換えれば、声の文化の整合性は、状況依存的であり抽象化されず、そのためカテゴリー化も分類化もされない特徴をもった生活と密着した実質論理であり、これに対して書く文化の整合性は、抽象的形式論理である。声の文化は、闘技的ダイナミズムをもっていて、このダイナミズムが後にレトリックや対話

\*6 『パイドロス』 岩波文庫版、135～136 頁参照。

\*7 W.J. オング著『声の文化と文字の文化』のうち、44 頁以下；p.17ff. in *Orality and Literacy –The Technologizing of the Word–*, by Walter Jackson Ong.

\*8 W.J. オング著『声の文化と文字の文化』のうち、169-172 頁；p.78-80 in *Orality and Literacy –The Technologizing of the Word–*, by Walter Jackson Ong.

\*9 W.J. オング著『声の文化と文字の文化』のうち、225 頁以下、289 頁、350 頁；p.107ff., p.139 and p.169 in *Orality and Literacy –The Technologizing of the Word–*, by Walter Jackson Ong.

法に発展する。入学試験や筆記試験 examination という言葉に相当する古典ラテン語はなく\*<sup>10</sup>、文字印刷の普及とともに公教要理（真偽善悪美醜の固定的—形式的基準）Catechismや教科書 textbook が登場して\*<sup>11</sup>、入学試験や筆記試験が確立した。従来の教育慣行は「暗誦」であり、知能指数を計る知能検査は、近現代的知性の前提となっている。聖書に、「文字は人を殺し、霊は人を生かす」（新約聖書「コリント後書」3:06）という言葉があり、信仰は聞くことに拠る。また、思考は、音声としての言葉に宿るのであり、テキストそのものではない。

文字の文化は、ギリシア文字アルファベットの成立によって音韻を完全に表現できるようになった。声の文化から派生したレトリックは、原因結果・定義・反論・類推と常套句の集まりという両文化の特質をもっていて、反対定立的であり、反論を予想して、その反論にさらに反論する特徴がある。西ヨーロッパには、闘技的レトリックにみられるように、闘争・権力など、精神の内部と外部において、極端を極限にまで推し進める根深い傾向があり、アジア的パトスとは逆である。文字の文化は、声の文化から切り離された学術ラテン語の成立によって、近代科学の確立に貢献した。印刷によって認識活動は「モノ化」して、思考文化は聴覚から視覚へ移行していった。古代ギリシアの戯曲は、当初から書物であり、クライマックス・大団円などの結び目のあるプロットをもつ。文字の文化の印刷書籍の典型は、エドガー＝アラン＝ポー（Edger Allan Poe 1809-1849）著『モルグ街の殺人事件』*The Murders in the Rue Morgue* という最初の探偵小説であり、概して探偵小説は完璧なプロットをもつ\*<sup>12</sup>。口頭で語ることに比べて、書くことは時間がかかり、一人の作業である。一定時間の孤独が反省をうながし、意識を高めて、思索において鋭い推理など、秩序だった構成を形成する。内省 introspection を求めるキリスト教敬虔主義には、

\*<sup>10</sup> W.J. オング著『声の文化と文字の文化』のうち、120-121頁；p.55 in *Orality and Literacy—The Technologizing of the Word—*, by Walter Jackson Ong.

\*<sup>11</sup> W.J. オング著『声の文化と文字の文化』のうち、275頁；p.131-132 in *Orality and Literacy—The Technologizing of the Word—*, by Walter Jackson Ong.

\*<sup>12</sup> W.J. オング著『声の文化と文字の文化』のうち、295頁；p.141 in *Orality and Literacy—The Technologizing of the Word—*, by Walter Jackson Ong.

聖アウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354-430) 著『告白』 *Confessiones*・聖テレーズ (Sainte Thérèse de Lisieux 1873-1897) 著『魂の物語』 *L'histoire d'une âme* (『自伝』) をはじめ、清教徒は習慣的に日記を付けているなど、内省は書くことと結びつき、書くこと読むことは、個人を内面的思考へ引き込む\*<sup>13</sup>。言語行為説 speech-act theory や読者反応説 reader-response theory は参考になる学説であり、発話行為 (発話して、或る言葉の組み立てを作り出す行為)・発話内行為 (発話者と話の受け手との間の相互作用的状况を表現する (発話者自身の) 行為: 約束・挨拶・断言・自慢など)・発話媒介行為 (聞き手のなかに、意図された効果: 恐れ・確信・勇気などをうみだす行為) から成り立つ\*<sup>14</sup>。言語行為説は、グライス (Herbert Paul Grice 1913-1988) による協力の原理 cooperative principle を含んでいる (「或る会話にわりこむためには、その人がかかわろうとしている話の交換のなかで受け入れられている (話し) の方向にしたがわなければならない」)。読者反応説は、書くこと読むことは、口頭のコミュニケーションとはまったく異なるという自覚にたち、口頭のコミュニケーションでは、語り手と聞き手が互いに眼の前に存在するのに対して、書き手が書くときは、普通読者は不在であり、読者が読むときは、普通書き手は不在であって、したがって、テキストの客観性というのは一つの錯覚である、と主張する。西ヨーロッパの哲学思想伝統は、プラトンとりわけアリストテレスによる書く技術に依拠している。現代的メディアの発想は、情報をモノ化することを土台として、受け手や送り手の状況を考慮せず、無人の聴衆・無人の観衆に対しても、ラジオやテレビは話したり見せたりすることができる (マックス = ピカート 著『沈黙の世界』 Max Picard (1888-1963) : *Die Welt des Schweigens*)。人間的な声のコミュニケーションは、話を始める以前に、自分と相手の立場を考える。自分や相手などの立場を、全体のなかで関連づけて、特有な意味を与える。要するに、話す以前に、コミュニケーションが始まり、相手の応答が予想されている。意識のすぐれた働きは、相手と自分がともに、

\*<sup>13</sup> W.J. オング著『声の文化と文字の文化』のうち、310頁以下; p.149ff. in *Orality and Literacy -The Technologizing of the Word-*, by Walter Jackson Ong.

\*<sup>14</sup> W.J. オング著『声の文化と文字の文化』のうち、345頁以下; p.166ff. in *Orality and Literacy -The Technologizing of the Word-*, by Walter Jackson Ong.

それぞれの精神のなかに存在し、相手と自分がそれぞれの精神のなかで相互に無言に確認し合うことである。現代的メディアは、こうした意識を持たない。声の文化と文字の文化の相互作用が個人と全体とにおいて、深化して統一に向かうことが理想である。

### (3) まとめ

声の文化ないし話し言葉は、日常性を生き生きとそのつどそのつど再活性化するのが眼目であり、ダイナミズムを持ち、状況全体との関連がつねに意識されている。自分と相手とのコミュニケーションは、あらかじめ自分と相手の立場を予想することから、すなわち、実際に声に出して話し合う以前から始まっている。文字の文化ないしは書き言葉は、内省や静謐を希求する。書くことは時間がかかり、一人の孤独な作業であり、孤独が反省をうながし意識を高めて、推理・因果論理性など秩序だった構成を形成して、キリスト教の敬虔な信徒などは、日誌をとおして自省を深めていった。

## 2. 「単独者」概念と修道士の思想伝統

### (1) 語源的背景

キェルケゴール思想における「自己生成」概念すなわち真実の自己ないしは自分を探求する思想の前提になるのは、自分とは何かという哲学的人間学的問いかけに対する回答としての一定の自己像が、そもそも何であるかということである。キェルケゴール思想においてこの自己像は、「単独者」den Enkelteと呼ばれる。den Enkelteという言葉は、全体の構成員の一人としてのdet Individuum（個体）という倫理的規範的－論理－構成的な意味を含意する言葉とは異なって、den Enkelte foran Gud at være（神の御前に独りで立ち尽くす者）というよく知られたキェルケゴール自身による単独者の定義から明らかのように、宗教的－情緒交流的－自己洞察的な意味を含意する言葉である。

den Enkelteという言葉と、語源的に類似性の著しい言葉が、munk（デンマーク語名詞）/monk（英語名詞）である。monkは、monachus（ラテン語形容詞）>μοναχός（ギリシア語形容詞）から派生した言葉であり、μοναχός

は、基数としての 1、孤独、たった一人を元来意味している。さらに、μοναχός は形容詞 μόνος から派生した言葉であると考えられ、基数としての 1 を意味すると同時に、一体（集合としての 1）を意味している。そして μόνος の語源が、形容詞 μόνος と形容詞 μανός であり、μόνος は主として、基数としての 1 の孤絶性や単独性を指示しており、μανός は、実質論理的－情緒的価値判断として希少性や珍奇性を指示している。

このように語源的に den Enkelte を遡及すると、カントやヘーゲル論理学における det Enkelte (das Einzelne) (論理上の実体としての個体) という言葉以外に、そもそも重要な教会伝統である修道士の存在が浮かび上がってくるのである。そして、munk という言葉が本来、世間から隔絶して孤独に生活する者を意味するだけではなくて、何らかの一体性や結合結束連帯性、おそらくは、神や隣人との一体性や結合結束連帯性を含意するとともに、稀少的－実存的な価値付けを含意するという、きわめて多義的－重層的で複合的な意味合いをもった言葉であることが明らかになってくるのである。

ただし、日本語においては一括して「修道士」「修道僧」として翻訳されている言葉は、ヨーロッパ文化圏の諸言語においておおよそ、四つの群に細分化できるだろう。それら四つの言葉を英語で表すと、monk (修道士・男子修道士)、nun (修道女)、friar (托鉢修道士)、anchorite / hermit (世捨て人・隠修士) である。

nun の語源は遡及すると、nunne (古英語: 修道女・処女・誓願献身女) > nonna (ラテン語: 修道女・家庭教師、元来の意味は子供言葉として、年上の女性に対する親称であり、叔母さんないしはおばあさん、nonnus の女性形) < vavva (ギリシア語: 叔母) / nona (サンスクリット語: 母) / nana (ペルシア語: 母)、となる。なお、nona (サンスクリット語: 母) / nana (ペルシア語: 母) は、nena (セルビア＝クロアチア語: 母) / nonna (イタリア語: 母) / nain (ウェールズ語: 祖母) と同語源であると考えられる。nun は意味上、sister と同一であり、sister は、初代教会の頃から女性信徒に対する親称であった。

friar の語源は遡及すると、frere (12-13世紀頃の高フランス語ないしノルマ



ンフランス語：托鉢修道士（托鉢修道会は、1155年カルメル会成立・フンススコ会1209年成立・ドミニコ会1216年成立・アウグスティノ会1244年成立）・兄弟、元来は九世紀頃成立した言葉）<frater（ラテン語：兄弟、ラテン語新約聖書において教会における男性信徒に対する親称）、となる。anchoriteは、ἀναχωρητής（ギリシア語：世捨て人）にまでもどり、ἀναχωρητήςはἀναχωρέω（ギリシア語動詞「退く」）から派生している。また、hermitの語源は、eremita（ラテン語）<ἐρημίτης（ギリシア語形容詞：砂漠の）<ἐρημος（ギリシア語：砂漠）である。

## (2) monk/nun/friar/ anchorite / hermitの思想的特徴

monkは、すでに述べたように、世間から隔絶して孤独に生活する者を意味するだけではなくて、何らかの一体性や結合結束連帯性、おそらくは、神や隣人との一体性や結合結束連帯性を含意する言葉であり、初期キリスト教における砂漠の父祖や第二エルサレム神殿末期頃のユダヤ教隠修士（ギリシア語θεραπευταί/ラテン語therapeutaeと呼ばれ、ユダヤ人哲学者であったアレクサンドリアのフィロン（Φίλων ὁ Ἀλεξανδρεὺς BC.25-50）による著作『瞑想生活』*Περί βίου θεωρητικού*（ギリシア語）/*De vita contemplativa*（ラテン語）に詳述されており、θεραπευταίという言葉は拝礼と癒やしを意味するθεραπεύωから派生していて、高德な人格を持ち瞑想するアレクサンドリア近郊の湖に住まいする人々であり、治癒能力をもつ癒やし人）まで思想的に遡及できる言葉であって、新約聖書においては荒野で試練を受けるイエス＝キリスト、旧約聖書においては神に呼ばわり、一族郎党を連れてツロから砂漠の荒野へ旅立ったアブラハムや病気のヨブ、シナイ山中で神と対面するモーセや40年間砂漠の荒野をさすらったイスラエル人などが、monkの信仰の源泉となる。nunは元来、叔母・母といった言葉と関連する、年上の女性に対する親称であり、新約聖書使徒行伝などに記述されている女性の輔祭ないし助祭・教会執事・奉仕女に、思想的に遡及できる言葉である。friarは、とりわけ托鉢修道士を指示する言葉であり、monkとは異なって、人里から離れて居住するのではなくて、村や町などで一般の人々の集落に接して居住して、人々の生活を様々に手助けする実践を



ととして、神に仕える者を意味するのであるが、元来は、nun と類似していて、教会における男性信徒に対する親称であった。anchorite と hermit は、人里から隔絶して生活困難な場所にあえて命を賭けて居住する点に思想性がある。

### (3) 修道士と単独者の思想的親近性

キェルケゴール思想における自己生成、すなわち、den Enkelte (単独者) の哲学的人間学的構造と展開については、主として『不安の概念』・『死にいたる病』において構造が、主として『これか=あれか』・『人生行路の諸段階』・『後書』において展開が記述されている。

den Enkelte の構造、すなわち、可能性と必然性の総合としての自由、総合の総合それ自体に対する構え・態度・反省・省察としての自己、自己の基底にある神との関係としての信仰などは、munk (修道士ないしは隠修士 hermit) の人間像ときわめて類似した点が多い。可能性と必然性の総合という理解は、新約聖書における霊と肉に、自由は、「神曰へり、人を我等の像と、我等の肖とに従ひて造るべし」(日本正教会訳旧約聖書「創世記」1:26)における像 εικῶν (神に向かって聖化-神化-神成する力や可能性) と肖 ὁμοίωσις (完成・完全性) について、ニュッサのグレゴリオス (Γρηγόριος Νύσσης 335-394) などが主張しているように、アダムとエバの墮罪によって肖は完全に破壊されたが、像は損傷を受けたが未だなお人間のなかで働き続けているために、εικῶν として人間に与えられている自由はなお存続している。総合の総合それ自体に対する構え・態度・反省・省察としての自己は、砂漠の父祖に始まる教会伝承である「イエスの祈り」προσευχή του Ιησού/Jesus prayer/prayer of the heart の瞑想思想における深化する自己観察や自己調律に相当し、自己の基底にある神との関係としての信仰は、「イエスの祈り」における理想として θεοφάνια 神現を感じることに、言い換えれば、神の实在や臨在を心と身体からなる全身で感じることに相当するであろう。

den Enkelte の哲学的人間学的展開は、よく知られている三段階論 (美的-倫理的-宗教的 A & B 段階) における自己生成言い換えれば人間精神の成長をめぐる記述であり、こうした段階論の人間精神の成長についても、「イエスの

祈り」の瞑想法のなかで、例えば、シナイ山麓聖カタリナ修道院の修道士ヨアンネス＝クリマコス（Ἰωάννης τῆς Κλίμακος 579-649）による著作『天国の階梯』*Κλίμαξ/Scala Paradisi/Ladder of Divine Ascent*は、全30章をとおして、抑鬱・不安・絶望を含む様々なマイナス感情やプラス感情をへて、最終的には、祈り προσευχή・静謐＝静寂－沈黙－憩い ήσυχία・落ち着き ἀπαθείαを越えて、神愛 ἀγάπηにいたる仕方、人間精神の道程が記述されている\*15。また、修道士エヴァグリオス＝ポンティコス（Εὐάγριος ὁ Ποντικός 345-399）は、『おこない』*Πράκτικος*のなかで、人間精神が「罪」ないしは「ズレ」ἀμαρτία（語源的には、ギリシア語動詞 ἀμαρτάνειν（的を外す）に由来する）に陥る原因となる精神の病の兆候として八つの情動感情を挙げて、それらは、大食貪欲・物欲強欲・不純性欲・怒り・抑鬱・自傷自殺願望や絶望・虚栄心・傲慢高慢であると述べている\*16。

キェルケゴール思想における単独者理解が修道士や学僧と緊密に関係していることを、デンマークの宗教学者ヴィルヘルム＝ペーター＝グリェンベック（Vilhelm Peter Grønbech 1873-1948）が小論「キェルケゴールとグルントヴィ」*Kierkegaard og Grundtvig*のなかで指摘しているが\*17、実際のところ、正教修道士が厳守する静寂主義 Hesychasm（ήσυχασμός、語源的には ήσυχία：静謐・静寂・沈黙・憩いに由来する言葉）とキェルケゴールのレトリカルな文脈による思索には、きわめて親近性があるということが出来る。また、キリスト教正教神父J. レールupp（Jean-Yves Leloup 1950-）は、キリスト教における公教と秘教の関係について述べて\*18、キリスト教信仰には、「歴史的－制度的－公

\* 15 *The Ladder of Divine Ascent*, by Saint John Climacus, revised edition, Holy Transfiguration Monastery, Boston, Massachusetts, 2012 (1959)のうち、例えば絶望 despair については、5:30, 5:38, 6:10, 15:32, 15:33, 15:34, 22:3, 23:44-45, 26:89, 26:126, 26:147, 26:151, 26:s:50, 26:s:60.

\* 16 p.30 in *Being Still –Reflections on Ancient Mystical Tradition–*, by Jean-Yves Leloup, translated by M.S.Laird, Paulist Press, New York/Mahwah, N.J., 2003.

\* 17 s.189-194, s.202 in *Kierkegaard og Grundtvig in Kampen om Mennesket*, af Vilhelm Peter Grønbech, Jespersen og Pios Forlag, København & Oslo, 1930.

\* 18 p. 12ff. in *Compassion and Meditation –the Spiritual Dynamic between Buddhism and Christianity–*, by Jean-Yves Leloup, translated by Joseph Rowe, Inner Traditions, Rochester, Vermont・Toronto, 2009 (French Edition, 2000).

教会の潮流」historical/institutional lineageと「思慮深く表立たず目立たない潮流」discreet lineageがあり、イエスが弟子に教えた「主の祈り」が公教の原点であり、イエスがサマリアの女に語った「霊と真による祈り」（後の「イエスの祈り」）（新約聖書ヨハネ伝4:1-26）が秘教の原点であると指摘して、さらにレールuppは、秘教の内実が「内省」meditationであると語っている。なおレールuppは、「思慮深く表立たず目立たない潮流」discreet lineageという表現を使って、「秘教」という言葉を直接用いているのではないが、秘教という言葉は、語源的にみると、秘教esotericism（英語名詞）<ἐσωτερικός（ギリシア語形容詞：仲間内に属している）<ἐσωτέρω（ἔσωの副詞比較級：さらに内へ）<ἔσω（前置詞：内に、ἐς/ἐνς/εἰςに接尾辞ωが付加）<ἐς/ἐνς/εἰς（前置詞ἐνに接尾辞ςが付加）<ἐν（接頭辞・前置詞：内に）であり、元来はアリストレスの非学問的著作やピュタゴラスの教説を指示する言葉であるが、ἐσωτέρωやἐνから派生する点を考慮すると、「内面化」inderliggørelse（デンマーク語名詞：副詞inderligに動詞gøreと接尾辞lseが付加）・「内面性」inderlighed（デンマーク語名詞：副詞inderligに接尾辞hedが付加）という言葉にきわめて親近性があることに気づかされる\*<sup>19</sup>。

### 3. キェルケゴール思想における二大精神潮流と現代的意義

#### (1) レトリックと自己吟味ないしは自己観察

キェルケゴールの建德的講話群は、読者への序文・祈り・聖句・聴衆への語りかけという構造と展開を一貫して有していて、自分に対する内省・聖句の内容に対する印象や見解・読者への配慮・聴衆への配慮・神への思いなど、複合的な対話性を示唆するレトリックによって成り立っている。キェルケゴールの仮名著作群は、当時のひとつの流行であった仮名を用いた記述であるが、仮名著作群がキェルケゴールの執筆したものであることは、当時主な読者であった国教会牧師やこれに類する教養層は間違いなく知っていたであろう。仮名著作

\*<sup>19</sup> なお「公教」exotericism（英語名詞）の語源は、exotericus（ラテン語名詞）<ἐξωτερικός（ギリシア語形容詞：外部に属する）<ἐξώτερος（副詞比較級：より外に）<ἐξώ/ἐξ（接頭辞・前置詞：外に）である。

であることが、むしろ逆に、著作の真の執筆者の存在へ読者を強く引きつけると同時に、仮名が、真の執筆者からのひとつのメッセージであり、著作の主張の真偽について真の執筆者が責任を負わないという暗喩であり宣言であるらしいことを、当時の読者は、確実に感じ取っていたに違いない。キェルケゴールの生前に公刊された著作群においては概して、ヨーロッパ精神史における声の文化伝統である対話性と文字の文化伝統である静謐な内省という二大潮流それぞれがキェルケゴール独特のレトリックによって、見事に織り込まれていると云える。キェルケゴールのレトリックによって、キェルケゴール自身・読者層・作品中の人物群・家族友人知人など周囲の人々およびそれらの人々と神との関係という、複合的な諸関係によってのみ存立可能な人間存在が想定され記述されているのであり、また同時に、著作と何らかの仕方であれかかわるキェルケゴール自身も含めたすべての人々がそれぞれに、自己を深く内省して思索するように執拗に仕向けられ仕掛けられているのである<sup>\*20</sup>。

ただし、キェルケゴール思想には古代の正教修道士の思索とはまったく異なる近代的一プロテスタント的側面も先鋭にあり、例えば教会論などは、神の神秘体としての教会といったような神秘主義的理解が払拭されていて、教会をもっぱら単独者の理念的集合である戦う教会としてのみ理解している。キェルケゴールは『キリスト教の修練』のなかで、次のように書いている<sup>\*21</sup>。「戦う教会は、ひたすら生成を続ける i Vorden ばかりであるが、既存既成のキリスト教界 en bestaaende Christenhed は存在するだけであって、決して生成しない」SK16-s.198、「この地上にあるかぎりキリスト教会はつねに戦う教会である…戦う教会に対応するのは「単独者」den Enkelteであり、すなわち、精神的（霊的）かつキリスト教的意味で…キリスト教的戦いはつねに単独者に基づくのである。なぜなら、神の御前においてひとりひとりの人間は単独者であるというのが精神（霊）性であり、「集いとしての既存既成の教会」fælleskabは、ひと

\*20 W.J. Ong 著『声の文化と文字の文化』のうち、362頁；p.175 in *Orality and Literacy-The Technologizing of the Word*, by Walter Jackson Ong.

\*21 キェルケゴールの著作については、以下のテキストを参照している：Samlede Værker bind1-20, af Søren Kierkegaard, text og noteapparat er gennemset og ajorjort af Peter P.Rode, København, Gyldendal, den tredje udgave, København, 1962-1964.

りひとりの教会構成員がそうでありうるしまたそうでなければならない単独者よりも、低次の規定なのである」SK16-s.208、「既存既成の集会 Menigheden は、静態であるが、単独者は動態である。なぜなら、この世界における人生は、まさに試練と波乱に満ちた時間であるから、「既存既成の集会」は此岸の時間にはなく、永遠のうちにはじめて生じるのだ」SK16-s.208、「戦う教会のみが真理である、言い換えれば、教会がこの世界にあるかぎり、教会は、卑下－謙遜 Fornedrelse な姿としてのキリストへ向かっていくのだから、戦う教会に他ならない」SK16-s216。さらに日誌ではキェルケゴールは、次のように述べている。「自宅のなかでこそ、神の臨在や神が御前におられることを、生き生きと自覚することができるだろう、まさにこの場所こそ聖なる場であり、あなたの居間こそ、聖所にならなければならない」Pap.X1A212、「集会や集団に単独者が関わるのが神との関係を決定づけるのではなくて、単独者の神との関係が、集会や集団との関係を決定づけるのである…単独者は絶対的に会衆より高次の規定である」Pap. X5B245。

なおキェルケゴールの自己吟味や自己観察は、執筆して著作を刊行するという文字の文化伝統に収斂しており、自然のただなかで自然と一体化するかのごとくに瞑想するといった神秘性は払拭されて、キェルケゴールは自分の住まいの書斎のなかで、執筆をとおして内省を深めていったのであった。

## (2) 現代的意義

ニコラス・G.カー著『ネット＝バカーインターネットが私たちの脳にしていること―』*The Shallows: What the Internet Is Doing to Our Brains*<sup>\*22</sup>に拠れば、情報ツールは、人間を永遠に情報に束縛させる量的知性の権化であり、内省・内面性・静謐・余白や曖昧さを消失させるものである。ネットやハイパーテキスト（電子書籍・ワードプロセッサ文書など）は、コンテンツの断片化やバラ売りを促進し、インターネットリンクは、注意散漫状態を維持する思考中断

---

<sup>\*22</sup> ニコラス・G.カー著『ネット＝バカーインターネットが私たちの脳にしていること―』篠儀直子訳、青土社、2010 (*The Shallows - What the Internet Is Doing to Our Brains*, by Nicholas Carr)。

テクノロジーの体系に他ならない。さらにネットやハイパーテキストは、ユーザーのスキルの劣化ないしは消失・主体的勇気や決断の喪失・時空間認知や記憶力の萎縮・余白や曖昧さの否定・情緒や創造性の消失を促進させる。意識集中による深い読みが知性を発達させて、これに伴う静謐は本来、内省や瞑想の状態に類似したものである。読むことは、疑似体験ではなくて脳生理学的には実際の体験と同じ神経回路が働き、書く行為は、感覚をコピーすることであり、経験を拡大させるのである。コンテンツの断片化やバラ売りは、注意散漫状態を維持させ、PCにユーザーを釘付けするネットやハイパーテキストという思考中断テクノロジー体系の目的は、広告費等の利潤追求以外ではない。以上が、カーの主張である。

現代的状況とは、本来、日常性の基層であり全体の調和や協調および人間同士の間相互理解を基層とする声の文化が、破壊され病的に変質して、文字の文化の衣装をまとうことによって、余白や曖昧さ・創造性・情緒や情愛・緩慢さ・記憶・アイデンティティ（自分・家族・社会・民族・歴史などをめぐる神話・民話など）といった声の文化の優位性を急速に我々が失いつつあることであり、また本来、内省を深めて時空間認識を拡大するとともに、一貫した推理や因果論を含む整合的思考をもつ文字の文化が、知性のモノ化によって全体との関連性や文脈を断ち切れ、利害や欲望に屈服して従属する仕方、本来は真理や真実を内省によって心のなかで無限に反照する営み的手段であったにもかかわらず、現在では資格化・固定化・量化されて、大量生産される工業製品とたいした違いのない売買可能な観念にすぎない一消耗品に急速に変質しつつあることである。

声の文化形態は、病的に疲弊した文字の文化形態にすり替わり、文字の文化形態は、豊かな精神の母胎であった静謐や内省を手放して、近現代産業の速さ・効率・効果・均質性・利益利潤などに、最適化した形態に劣化しつつある。

キェルケゴール思想は、ヨーロッパの二大精神潮流を継承するとともに、砂漠の父祖に由来するイエスの祈りの内省を継承するレトリックを保持することによって、現代においてもなお、自己生成を触発するうえで、自己忘却に気づ

いていないことに気づかないという現代病理に対して、気づいていないことに気づくことを強力にうながす思想になっている。ただし、その自己とは、「共働」συνεργία的の自己であり、神や隣人との一体性や結合結束連帯性が、きわめて理想的ではあるけれども、含意された自己である\*<sup>23</sup>。なお、キェルケゴールの独特なレトリックを主導している知性は、ダニエル＝ゴールマン (Daniel Goleman 1946) が主張しているような、感情的知性 emotional intelligence \*<sup>24</sup> や社会的知性 social intelligence \*<sup>25</sup> であって、近代合理的－抽象的論理的－数理的知性ではないであろう。ゴールマンに拠れば、大脳皮質の発達、感情的知性や社会的知性の働きによるものであり、理論的知性は、そうした感情的知性や社会的知性に付加されているに過ぎない\*<sup>26</sup>。

\*<sup>23</sup> 「神の共働者」συνεργοὶ θεοῦ/συνεργὸν τοῦ θεοῦ (新約聖書「コリント前書」3:9、「テサロニケ前書」3:2)、「キリストにおける共働者」τὸν συνεργὸν ἡμῶν ἐν Χριστῷ (新約聖書「ロマ書」16:9)、「私の共働者」οἱ συνεργοὶ μου (新約聖書「ピレモン書」1:24)、「気づきをともにする共働者」συνεργοὶ γινώμεθα τῇ ἀληθείᾳ (新約聖書「ヨハネ第三」1:8)。

\*<sup>24</sup> ダニエル＝ゴールマン著『EQ 一心の知能指数―』土屋京子訳、講談社、2015 (1998) 年のうち、91 頁以下；p.46ff. in *Emotional Intelligence –Why it can matter more than IQ*, by Daniel Goleman, the tenth anniversary edition, Bantam Books, New York, 2006 (1995).

\*<sup>25</sup> ダニエル＝ゴールマン著『生き方の知能指数―ほんとうの「頭の良さ」とは何か―』土屋京子訳、日本経済新聞出版社、2007 年のうち、130 頁以下、161 頁以下；p.82ff, p.105ff. in *Social Intelligence –beyond IQ, Beyond Emotional Intelligence-*, by Daniel Goleman, Bantam Books, New York, 2007(2006).

\*<sup>26</sup> ダニエル＝ゴールマン著『生き方の知能指数―ほんとうの「頭の良さ」とは何か―』のうち、491 頁；p.334 in in *Social Intelligence –beyond IQ, beyond Emotional Intelligence-*, by Daniel Goleman.